



右隻



左隻



18 秋暮 村瀬玉田 六曲一双

絹本着色 大正五年（一九一六）
本紙各一五三・六×三六三・六

大正五年（一九一六）の日本美術協会第五十五回展覧会において宮内省買上げとなった作品。玉田は日本美術協会の重鎮として、同展覧会では審査官をつとめていた。

右隻には薄に藤袴、左隻は薄に萩や女郎花といった秋草が可憐に風になびき、水場でのどを潤したり、身を寄せ合ったりする雁の群れがその中に描かれる。玉田が没する前年に描いた作品であるが、筆力は全く衰えを見せず、力強い筆線で薄の葉の鋭さを描き表す一方で、羽毛をまとった雁の体は輪郭線を用いない没骨法や、筆を寝かせて太く柔らかな線とする付け立て法によって描出されている。右隻の空に浮かぶ月と、画面全体にたなびく金泥と薄墨による霞が夕暮れ時のもの悲しさや侘びしさを控えめに表現している。

京都から上京しておよそ三十年間、東京画壇で活動した玉田であったが、川端玉章が東京美術学校の教授となつて洋画の技法なども取り入れながら、近代的な円山派の展開を推し進めたのとは対照的に、あくまで四条派の伝統を固守することを貫き、大幅な画風の変革は図らなかつた。最晩年の作品である本屏風の明快な彩色や豊かな線描を見ると、玉田は四条派の祖呉春の草花図まで回帰することを目指していたように感じられる。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 — 円山派の伝統と発展

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections